

第15回 日本在宅医学会大会 プログラム別 詳細情報

| | |
|--------------|--|
| カテゴリー | シンポジウム(公募演題) |
| タイトル | 地域の在宅医療を支える新しい仕組みへのアプローチ 機能強化型支援診療所の落とし穴 |
| 日時 | 平成 25 年 3 月 31 日 9 : 00 ~ 12 : 00 |
| 会場 | 第 6 会議室 |
| 所属先 | 1) 帝京大学医学部附属病院泌尿器科学教室 2) 鳳優会あすかホームケアクリニック |
| 共著者 (敬称略) | 斎藤 恵介 1) 2)、古謝 将之 1) 2)、中島 晶子 1) 2)、堀内 明 1) 2)、井上正之 1) 2)、知名俊幸 1) 2)、永榮美香 1) 2)、小関達郎 1) 2)、吉井隆 1) 2)、磯谷周治 1) 2)、久末伸一 1) 2)、山口雷臈 1) 2)、井手久満 1) 2)、武藤智 1) 2)、堀江重郎 1) 2) |
| 企画趣旨 | <p>厚生労働省は 2025 年には、年間死亡者数が 160 万に達すると想定、そのうち 65 歳以上の死亡者数が約 140 万人に達する見込みとされている。病院で最後を迎える患者が急増し病院機能が麻痺してしまう懸念もある。政府が目指す 2025 年の医療・介護提供体制の理想像である「地域包括ケア」体制の構築に向けて在宅医療は充実が不可欠とされており、診療報酬改正でも様々な変更が加えられた。最も大きなトピックとして機能強化型在宅支援診療所の考え方が導入された事である。このため、在宅医療が推進され 24 時間支援診療所を掲げるクリニックや病院の増加をしている。しかしながら、こうした背景とは裏腹に年間の看取り数が 1 件も無い病院クリニックが多く存在しているのも事実である。</p> <p>機能強化型在宅支援診療所・病院（以下：機能強化型在支診・在支病）の目的は、医療機関 1 カ所あたりの負担を軽減することで、より多くの医療機関の在宅医療への参画を促し、看取りや 24 時間対応の充実を図ろうという考えがあると思われる。</p> <p>さらなる目的としては、機能強化型在支診・在支病の創設には、地域包括ケア体制のなかで在宅医療を担うことのできる機能を有している医療機関であるか否かを判断する狙いもあると考えられる。また、在宅医療を充実させるためには、在宅患者を急変時に受け入れる、いわゆる後方支援体制の強化も欠かせこうした医療機関をふるいにかける目的もある。</p> <p>本来の政府の目的は在宅医療推進である。では在宅医療推進を困難にしているものは何であろうか？</p> <p>鳳優会あすかホームケアクリニックは、大学病院勤務医師が構成する在宅クリニックである。帝京大学泌尿器科医局員 15 名で構成されており、随時新入医局員が増加することで構成人員が増加している。各々が疼痛緩和、がん治療、排尿障害や内科疾患に精通している。また、大学での横のつながりにより専門医との交流も容易であるという特徴を有している。先端医療と在宅を近づける</p> |

第15回 日本在宅医学会大会 プログラム別 詳細情報

役割を担っている。

在宅医療の現場をつぶさに見る事で 24 時間支援診療所、機能強化型在支診・在支病の利点・欠点に気付かされた。システムを有効利用するための新しいアプローチが必要であると考えられた。

機能強化型在支診として地域診療所がグループ化をする事で、24 時間在宅療養支援診療所の大きな問題点である夜間診療の体制を強化すべく持ち回りで夜間診療を交代する動きも出てきている。しかしながら、連絡先の 1 本化による夜間当番制の持ち回りにより、今まで関わりのなかった患者への対応を迫られることや、サービスの違う医療機関での対応による患者の不安感、患者の取り合いなど問題は山積している。

当院では、こうした在宅医療が抱える『往診体制』の問題を解決し、地域在宅医療を活性化させるために新しい仕組みを提案している。

当クリニックは、夜間往診を当番制で受け持っている。地域診療所と連携し、それぞれの診療所の患者に月 1 回の定期往診を行い、患者把握を行いながら、夜間往診を受け持つ仕組みである。診療所主治医が往診困難な時間帯に夜間往診を下支えする。外来で忙しい開業医にとってマンパワーの必要な 24 時間要件の在宅支援診療所の開設は困難である。

こうしたいわゆる『5 時まで在宅医療』の下支えを行いより機能強化型在支診のシステムの有効活用と地域在宅医療推進を行う目的がある。地域の在宅医療を支える新しい仕組みへのアプローチとして提案したい。